

# 吉備路を行く

古藤田 太

(会員・弥生町江良)

今回の弥生町文化財調査委員旅行は、出発直前、予期せぬ事故の勃発で、次々と欠落者が出て、三名になってしまいさびしい旅立ちであった。

午前七時、彗星は岡山駅に到着した。昭和二十五年から三十年頃の岡山を知る私にとっては、今見る岡山は全く別の世界であった。私共は、これから更にまた、未知の赤穂市を訪ねることにした。

播州赤穂は、人口五万の町で、元禄の世を沸かせた忠臣蔵の町である。街中歴史のにおいが漂い、観光の町として美しく手入れされている町でもあった。

駅に降りた時、男女生徒の剣士達が剣道道具を肩に隊伍を組んで通りすぎて行った。何か赤穂の持つ体質を見る思いがした。

小野英治氏の案内で、「息継ぎ井戸」に行く。

元禄十四年(一七〇一)三月十四日、浅野内匠頭が、江戸城中松の大廊下で、吉良上野介に刃傷した第一報を早水藤左衛門と萱野三平が、四昼夜半を一気に早駕籠をとばして赤穂に着くや否や、この井戸で一息つき、城の裏門から駆けこんでいったといわれる。然し、何の変哲も無い楚々たる井戸を見て赤穂城跡に急ぐ。途中、焼塩など塩を売っている店が目につく。私にとって驚きであった。考えてみると、赤穂の製塩業は、浅野時代に発展したことは周知のとおりである。

大石良雄邸の長屋門が残っていた。説明によると、享保十四年(一七二九)の火災で本部は焼失し、庭園と池泉とこの長屋門が残ったものである。大石神社に詣で、義士木像館をたずねた。義士像がずらりと並んで、力強い彫像に圧倒される思いがする。当代一流の彫刻家達の

手になるものと聞く。更に花岳寺をたずねる。正面の歌額に

よろづ世の人のかがみと匂ふなる

花をかでの庭のいしぶみ

とあった。

この寺は、浅野家の菩提寺として建てられたものであるが、浅野家のあと、永井家、森家の歴代藩主の菩提寺ともなった寺である。四十七士の墓が境内に在った。中央に浅野内匠頭、右に大石内蔵助、左に大石主税の墓が並び、粗末で小さい義士の墓がぐるりとコの字型に並べられてあった。墓域は極めて狭く、義士の遺品は隣りの宝物館に展示されてあった。この曹洞宗臺雲山花岳寺のみは当時のままのものと聞いている。

赤穂城跡は駅から近い。赤穂城は天保二年（一六四五）に常陸の笠間から転封してきた初代浅野長直が築いた平城である。今まで紹介した史跡もこの城跡の中に在る。美しい石垣が、たった今建物を取り払ったもののように眼前に迫ってくる。

小野氏の説明によると、この城は山鹿素行の指導による築造で、変形梯郭式と呼ぶ珍らしい築造であるとのこ

と。私の目にも異様に映る。

四十七士の義挙によって、日本人の魂が育てられた。

この日本史上稀な快挙の町を私共は大急ぎで見つて、再び岡山に向けて赤穂線を引き返した。

日本三大名園の後楽園をたずねる。今は枯草の庭の広さよ。栗林公園や兼六園とまた趣きの異なる庭園である芝生の緑濃き頃ともなれば、広大な空間が更に見事さを増すことだろう。草葺きの延養亭のほか、数寄屋の点目が目を楽しませてくれる。広い庭園に水をよく活かして使っているのを感じ入る。歩を進むる毎に景観が変る庭園といわれるだけあって、歩々の変化が面白い。

この後楽園は、備前藩主池田綱政が家臣津田永忠に命じて、十四年の歳月をかけ、元禄十三年（一七〇〇）に完成したもので、明治十七年に岡山県に移管されるに及び、初めて一般に公開されることとなったものである。

茶趣味を充分活かして、日本人の心を捉えた庭は、もともと「先憂後楽」の語彙から取られた園名と聞く。私の驚きの一に、この先憂後楽の庭に、領民の労苦を偲ぶため、自ら耕す田圃がしつらえてあることであった。

岡山城をたずねる。あたかも岡山城春季特別展の頃で

水曜日連続大型時代劇「真田太平記」の主人公真田左衛門尉幸村の兄、真田信之の信州真田家展が催されていた。個々の品々に亘って紹介のいとまもないが、波乱の世を十代二百五十年間生き継いだ松代藩十万石の真田家の遺品の数かずを目にして感無量であった。

岡山美術館に入り、風俗美術展を見学した。その中に洛中洛外図が二点展示されてあった。洛中洛外図は、室町後期より、主として屏風絵として発展、京都市内や郊外の名所や庶民生活を描いた風俗画であり、年中行事図でもあるわけで、そのきらびやかな大和絵の遺品を鑑賞できた。

時間があまりなかったが、三時頃から倉敷に急行した。ここで念願の大原美術館をたずねた。倉敷駅から歩いて十分ぐらいの所にあるのだが、痛む足をひいて、若い小野英治、五十川文士氏等の後を追うのは大変なことであった。

大原美術館は、倉敷紡績二代社長大原孫三郎が、画家にして美術収集家の児島虎次郎の生前の功績を記念して昭和五年に建てたものが本館である。

児島は、当時わが国に本格的な西洋絵画の収集が無い

ことを残念に思っていた。この児島の願いに、大原孫三郎が経済的援助を与えたもので、この二人の生涯変らぬ信頼と友愛によってできあがったのが、この大原美術館である。

ここには、モネ・マチス・コルケ・エルグレコの受胎告知や、ゴッガン・ロートレック・セガントイニなどの名作が、数多く展示されていた。私達には充分鑑賞する時間的余裕はなかったが、私はミレーの「グレヴィユの断崖」とか、暗い北海の海の絵には強い印象を覚えた。別館で東洋の美術を見学したが、それを仏教東漸の歴史を見る想いがした。わずかな仏頭や、仏像を観覧できただけでも非常に参考になるものがあった。

中国へ釈迦の教えである仏教が伝わり、何時頃から金銅仏や石仏像を造り始めたのであろうか。ガンダーラ地方で盛んになった仏像を造る流行は、「トウムシユク」「キジュール」「トルファン」の各地に石窟寺を造りながら進み、敦煌の地に石窟寺を造り始めたのは四世紀後半からであろう。勿論、仏教が中国に伝わったのは、もっと早く、紀元一世紀後漢頃であつたらしい。

中国の歴史を通じて造寺、造仏の盛んな時代は、拓跋

氏の建てた北魏（三八六一五三四）の時代と、北齊、北周（五五〇―五八一）のときで、その間凡そ二百年間である。

この東洋美術館に、北魏時代の一光三尊守が展示されてあった。中央に仏、左右に二菩薩の構成を示したもので、均整のとれた背丈の高い仏像であったが、まだ我々の平素親しむ仏像とは似もやらぬ異国情緒のものであった。この北魏の作風は、我国奈良時代前期の仏像に影響を与えたといわれている。確かに飛鳥仏や、法隆寺の釈迦三尊仏を見ても首肯できることである。

北齊、北周の仏頭も展示されてあった。この六世紀の時代ともなると、そのお顔は、中国人に似ていると、私には直感された。我国の貞観、藤原時代には、インドや中国に於て発達した造仏上の儀軌の規正が、我国にもたらされて影響を与え、凡その統一規格品ができるようになった。今回観た北齊、北周の仏頭の螺髪にしても、既に我々の見なれた螺髪になっているものもあつた。私達是我国の仏像より一足も二足も前の仏像の姿を見たことになるわけである。それは四世紀のガンダーラの仏頭と相当の開きがあることを、この眼で確かめることができた。

我国で日本化された仏像がつくられるようになったのは、平安中期の定朝の出現をまたねばならないから、我々が垣間見た仏像は、我国仏像の祖先とでも言い得る古い歴史を語るものであつた。

大原美術館に名残りを惜しみつゝ急いで館を出ると、もうそこには明治の香り豊かな倉敷館、民芸館、郷土玩具館等のたたずまいが、次々と楊柳の影を透して眺められた。

三月二十二日午前七時、宿舎を出て、レンタカーを借り入れ、小野英治氏運転。五十川文士氏が補導役で吉備路を辿ることにした。

まず訪れたのが、吉備津彦神社であつた。壮大な神社があると共に、異相の社殿に驚いた。

崇神天皇の頃、大和朝廷が派遣した四道將軍の一人吉備津彦命を祭る神社で、吉備国の一の宮として、古くから信仰を集めている。

駐車場の設備から推しても随分と参拝者があるらしいが、私共の訪れは余りに早く、人影はまばらであつた。本殿は流れ造りで、別名を吉備津造りといい、荘嚴な神域によくマッチしていた。境内に東洋一という大石燈籠

が二基、でんと置かれてあった。

吉備路を走

っている、

左方に丸い気

品のある山が

見え出す。小

野氏が、あの

山には何かあ

りそうだとい

う。案の定、

それは歌枕で

有名な吉備路の中山であった。後で調べてみると、七世

紀頃、備中、備前と分国された時、中山を分けて流れる

細谷川に沿って国境が定められ、歌枕の地となったとい

われている。

先刻参拝した吉備津彦神社の祭神吉備津彦命を、吉備国の総氏神としてここに祀る吉備津神社である。わずかに「彦」の一字が欠けていて、やはり大きな宮居の流れ



吉備津彦神社

造りで、回廊の長さ三百メートルも続く堂々たる神社であった。その回廊の途中にお釜殿があった。立寄ると、偶然鳴釜の神事が行われていて参拝することができた。ここでは記念の鬼鈴を求めた。

吉備中山宿で備中国分寺をたずねた。国分寺は、天平十三年（七四一）聖武天皇の発願によって、全国の国府所在地に建てられたもので、七百七十年頃には、ほぼ全国に建立された。

寺地は土手に囲まれた、方二町が国分寺として普通のようなのである。

備中国分寺の建物は、南北朝期の戦乱、福山合戦の戦火で焼失したと伝えられ、現在の五重の塔は、江戸期に建立されたもので、一階は樺材だが、樺材の不足から、残余の階層は松材を使って建立された。五重の塔の背後に往昔の礎石が一つ置かれてあった。近くの松林の中に国分尼寺の礎石が整然と残っていて、四天王寺式と謂われる構造建物が並んでいたことが解る。礎石そのものは豊後国分寺の方が、巨石を使用していたように思う。

ここからは、遥かに国分僧寺が望まれる美しい環境にあった。ささやかな売店もあった。別に、これといって



清水宗治首塚

記念になるものとして無く、ユズ漬け一袋を買って出た。午後になって備中高松へ行き、高松城跡をたずねる。ここも訪ねたい目玉商品の一つである。吉備地方は、敗者の歴史がつきまといっているといわれる。

戦国期には、秀吉による水攻めの悲劇が生れた。備中高松城は、低地の城といっても、かくも湿地帯の中に建てられたものとは想像もできなかった。築城のねらいが、

深田、沼地の築城は山城以上の要害と考えられたからに外ならない。今日見る以上に、当時は一面の湿地であったに違いない。高松城に迫るには、一騎打ち以外に術なしと考え

られたものであろう。さすがの秀吉も、大軍を以てしても、この城を、事実攻めあぐんでいた。軍師黒田官兵衛の意見を容れて、足守川を堰止め、水攻めにすることにしたものである。堤防工事は二十六キロに及び、基礎幅で、広い所は二十メートル、高さ七メートルの大堤防をわずか十二日間で築造したといわれる。

折からの梅雨下、足守川の増水は、忽ち高松城を水中の孤城と化した。毛利方の援軍が、大挙して城主清水宗治の救出に駆けつけた時は、とき既に遅く、万一に備えて幾重にも築造された堤防の護りは堅く、毛利救援軍は為す術もなかった。やむなく秀吉に和議を申し込んだのである。

とき恰も天正十年（一五八一）六月二日、本能寺の変が勃発。明智光秀から毛利方に放たれた密使が、秀吉軍に捕らえられた。秀吉は、信長の死を毛利方に知られることをおそれ、清水宗治の切腹を条件に、和議に応じたのである。

六月四日、城主宗治は、城兵五千の命と引き替えに、敵味方の見守る中で見事に切腹して果てた。

尋ねた城跡に、高い盛土をした宗治の首を祭る首塚が

あった。秀吉の築造した堤防が残っているというので、三人でたずねた。最も水匠がかかったであろうと思われる辺りに、小山程の規模でそれは残っていた。土地の人は「蛙ヶ鼻」と呼ぶようで、今は雑木林となっているが蛙ヶ鼻こそ歴史の証人として、戦国の非情さを何時までも語り継ぐものであろう。

高松城跡を後に、大鳥居をくぐって、我々の車は足守藩二万五千石の陣屋町をたずねた。

足守の町は静かな町である。今では観光客もまばらだが、古い城下町の名残りが色濃く残っている町である。漆くい効いた家並が目につく。足守は、歌人木下利玄の生れた町としてよりも、私には、大神一族の緒方洪庵の生家のあった町という方が魅力的に聞こえる。洪庵の生家跡は直ぐ解った。

洪庵は、文化七年（一八一〇）の生れで、医者であり教育家であったが、二十一歳で江戸に出て、蘭学を学び更にオランダ医師ニーマンに就いて西洋医学を学んだ。日本の西洋医学の基礎をつくった功労者であるばかりではなく、蘭学塾（適塾、適々塾と呼んだ）を開いて、幾多の有為の人材を養成した。大村益次郎・福沢諭吉・橋

本左内・大鳥圭介等は緒方洪庵に就いて学んだ人達である。

文禄二年（一五九三）豊後国が除国となり、榊牟礼城主十四代惟定は、宇和島の藤堂高虎に仕えるため佐伯を去って行った。惟定の弟の惟寛は足守の木下家に仕えてここに定着したもので、洪庵は、（緒方系図によると）

惟寛七代の孫に当るようである。遥かなる吉備路を訪ねてみると、ここにも大神一族が住みつき、栄えたことを知った。緒方洪庵、緒方惟栄のような大人物が輩出したかと思うと、今更ながら心温まる思いであった。

このほか、吉備路の旅の話は尽きない。雪舟のこと、六古窯の備前焼のこと、閑谷学校のこと等々、またの機会に譲りたい。

この吉備路が、備前、備中、備後、美作の四ヶ国にまだ分国されない七世紀前の吉備国は、製塩、砂鉄のほか稲作でも繁栄し、瀬戸内海に君隣する一大勢力であったであろう。然し、大和朝廷の政権の確立に伴い、吉備国もその勢力圏に組み込まれていった。今回見てきた四道將軍の吉備津彦命の派遣こそ、こうした鎮定劇の一幕ではなかったか、こうした吉備地方の盛衰の歴史を今では

懐かしく想いながら、替星の寝台車の夢路をたどること

となった。

随  
想

## 歴史と私

「佐伯史談」の編集をお引受けして、この号で二回目になる。

はじめ、この話を聞いたとき、「とにかくお引受けしなければいけない」と、何が何だか分らないままに、それが、まるで当然のことのように承諾の返事をしてしまった。あとで、どうしてこんなに簡単に返事をしてしまったんだらうと考えてみたが、どうしてもその理由は分らなかった。目に見えぬ誰かが「やるんだよ」とけしかけたような気もするし、一方では、「どうせ先は知れてるんだから、少しでも人の為に役に立つ仕事をしなけ

後  
藤  
知  
久

(会員・佐伯市中山区)

れば」と、自分自身の中から呼びかけられたような気もするのである。

そんなはつきりしない気持で、第一回の編集に取組んでみた。寄せられた原稿の一つ一つを読んでいくうちに「やっぱり畑違いだったかな」という思いにかられた。それは、興味の無い世界というのではなく、どの原稿を読ませていただいても、日頃の研究のご苦労が思いやられて、「自分のようなものが」と、改めて自分の不勉強ぶりを思い知らされたからであった。

この思いは、次の図書館における「オランダ船リーフ